大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

翻訳　F. W. Graf著「エルンスト・トレルチのプロフィール：ボンにおける足跡」(トレルチ研究 1 に所収) (1)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2013-12-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 高野, 晃兆
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007804

翻訳 F.W.Graf 著 「エルンスト・トレルチのプロフィール：ボンにおける足跡」（トレルチ研究1に所収）〔1〕

高野晃兆*

Übersetzung von F.W.Graf'"Profile von E. Troeltsch: Spuren in Bonn"(in:Troeltsch-Studien 1)〔1〕

Teruyoshi TAKANO*

トレルチの神学をその生活史の分脈のなかで把えようとする試みにおいて，トレルチが員外教授としてボンで活躍した時代を思い浮かべようとするとき，独特の困難に遭遇するであろう．>>Album professorum ordinariorum et extraordinariorum facultatis evangelicae in universitate Fridericia Guilelmia Rhenana. Inchoatum anno MDCCCXLV.<<——ここへすべての新しく入ってきた学部の構成員は自分のこれまでの経歴を書き込んだ——における短いタイプライター用紙1頁の経歴以外にトレルチはボンに足跡を残さなかったように思われる．同時にボンはトレルチの生活と神学に決定的に刻印しなかったという逆のことも真実であるように思われる．トレルチに対するこれまでの伝記上の文献においてボンでの2年間は，それが言及されるとき，いずれにしても何の役割も演じていない．ボンの学部が自分自身の歴史を振り返っているところで，史料編纂者はトレルチは1892・4・1から1894・3・31まで後のハイデルベルクの同僚ルートヴィヒ・レメの後継者として第二の組織神学の教授のポストを占めた，と述べる以上のことはしなかった．

ボン大学のArchivにすらトレルチの足跡は見いだされえない．プロテスタント神学部に関して資料の損失は非常に大きいので，われわれは古い叙述を検査すらできないし，いわんや改善したり或いは補ったりする事は出来ない．ボンの学部は1968年に学部創設の動機と存続150年の理由から回顧を行った時，ボン大学は回顧をかってボンにおいて営まれた神学の包括的な叙述の形をとらず，オットー・リッチュルの有名な古い叙述を継続し，そしてボンにおけるプロテスタント神学の歴史にとって特に重要と思われるボンの学者たちの伝記的プロフィールを前に置くことに限った．その際一般には 神学の歴史に対して比較的大きな意義を持ち，そしてボンの学部の研究に重要な関わりを持ったか或いはその人のライフワークにとってボン時代が間奏以上の意味を持った様な学者が叙述されるので，トレルチはこのボンにおける学問の歴史への貢献においては，この原則に則って，組織神学の部門ではイーザク・アウグスト・ドルナー，リヒャルト・ローテ，マルティン・ケーラー，エルンスト・トレルチ，実践神学の部門ではフランツ・シュタインマイアー，そして歴史神学の部門では例えばカール・ベルンハルト・フンデスハーゲンといったような功績ある学者が考察されないということがはじめに確認されるところにだけ現れる．何となればボンにおける彼らの短い活動はボンにもまた彼ら自身の仕事にも深い足跡を残さなかった．ボンにとってトレルチはほとんど言及に価しない．これに対応するのがトレルチ自身の相応する所見である．彼が彼の人生航路を，一連のその他の原理に逆らって，彼の書物の順序と事実の連関を叙述することによってのみ描いているので，ボンは「私の著書」において場所を持っていない．ボンにおけるトレルチは，もはや何も述べられえないテーマであるように思われる．なぜならば存在した足跡が消えてしまったように思われるからである．

これまでに探り出されえたいくつかのことは以下に記される．その際，それらを1枚のスナップに収めること以上のことは意図されない．このスナップを適切に解釈することは更なるスナップの知識を前提としている．1枚の写真が更なるスナップが取られうるかどうか，という問を呼び起こす．

I

1891年夏学期，組織神学の教授ルートヴィヒ・レメはハイデルベルクの——本来は信仰的に保守的な人のために設けられた——組織神学の講座への招聘を受け入れたとき，ボンの学部は，第二の組織神学の教

1994年4月11日受理

*一般教養科（Department of Liberal Arts）

授の補充についての提案を説明することを，文部省によって要求された．ボンの関連する文書は――学部の文書も学部と文部省の間の文書交換が経由した大学の管理機関の文書も――戦争で全滅させられたので，その時代の経過はベルリンプロテスタント中央雑誌に保存されているプロテスタント上級教会会議の文書から間接的にのみ構成されうる．そこにはトレルチは学部の本来の意志に反してボンの員外教授に招聘されたということが示されている．

１８８１年夏学期にボンの学部は――招聘順に名前を挙げると――次の構成員から構成されている:ヨハネス・ヴィルヘルム・ルートヴィヒはあらゆる観点において学部の最も年輩の構成員であった．彼は１８４６年ボンで教会史の教授資格を得た後，彼はボンで員外教授になり，そして１８５９年ついに教会史の正教授になった．すでに６９才であったけれども，彼は依然として学問的プロテスタント神学セミナーの教会史部門の長であった．アドルフ・ヘルマン・ハインリッヒ・カムプハウゼンは１８５５年ボンで旧約聖書の教授資格を獲得した．彼はハイデルベルクで２～３学期過ごした後，ボンで１８６３年助教授になり，１８６８年旧約神学の教授となった．アントン・エーミール・フリートリッヒ・ズィーフフェルトはケーニッヒスベルクで教授資格を獲得した後，１８７１年夏学期にプロテスタント神学財団の視学官として，また私講師としてボンへ来た．ここで１８７３年組織神学の助教授となった．彼は１８７８／７９の冬学期から１８８８／８９の冬学期までエアランゲンの改革神学の講座を担当したのち,１８８９年の夏学期に組織神学並びに新約聖書学の正教授としてボンへ帰ってきた．１８９１年彼は学部長であった．

すでに長らくボンで教鞭をとっていた人たちと並んで数年前からようやくボンで活躍する一群の人たちがいた．ヨハネス・フリートリッヒ・ヘルムート・マインホルトは１８８４年グライスバルトで旧約聖書神学の教授資格をとった．グライスバルトで彼は１８８８年助教授になった.文部省の指令によって彼は１８８９／９０年の冬学期にボンの同じポストへ移された．彼はラインラントの保守的でかつ敬虔なサークルによって＜自由主義者＞として激しく議論をふっかけられたので，<<ウエルハウゼンの信奉者>>である彼はボンで１９０３年にようやく教授になることができた．レメの後継者についての学部の審議に参加する権利を１８９１年には員外教授の彼は与えられていなかった．――オイゲン・フリートリッヒ・フェルディナント・ザックスゼーは教会活動のさまざまなポストについた後，１８９０年の夏学期に５１才でボンの実践神学の教授としての招聘に応じた．<<プロテスタント神学部の教理問答並びに説教学のセミナー>>の長として彼は同時に大学の説教者であった．ザックスゼーの後，一学期してエドゥアルト・グラーフェはボンへ来た．彼は１８８４年ベルリンで新約聖書神学の部門で>>Erklarung des 7. Capitels des I. Cor. Br. nebst Darstellung und Kritik der paulinischen Anschauung von der Ehe<<の研究で教授資格を取った後，１８８６年彼はハレへ移動させられた．そこで彼はアルベルト・アイヒホルンやオットー・リッチュルと一緒に若い員外教授のサークルを形成した．彼は１８８９年冬学期から１８９０年の夏学期までキールで正教授を務めた後，彼は１８９０／９１年の冬学期に新約聖書学の教授としてボンへ招聘された．ここで彼は学部の中心人物の一人となった．＜自由主義者＞として激しく敵視されたとき，彼はベルリンの文部官僚並びに＜保守的＞な勢力をえこひいきする彼らの政策と戦うことを断念し，また健康上の理由もあって１９１３年ついに職を放棄した．――トレルチの一年前にカール・ヴイルヘルム・ヨハネス・ゼルがボンへ来た．すでに４５才で，彼は１８９１年の夏学期に教会活動から身を引き，そしてボンの教会史の第二講座への招聘に応じた．ボンでは彼は学問的セミナーの教義史の部門の長となった．

組織神学の第二講座のポストを埋めるためのリストを作成することは，前世紀の９０年台にはまだ確固とした地位のない若い組織神学者が多数存在したわけではないので，学部にとって容易ではなかった．けれども学部は１８９１年６月末に協議を終えた．決定の<<報告>>は１８９１年６月３０日の日付けになっている．<<組織神学のレメ教授のポストの補充に関する>>この<<提案>>は大学の理事者によって７月３日にベルリンへ回された．第二番目に推薦された人に関する報告の一部から一つのコピーが存在する．コピー以外のその他の内容は，少なくとも一部は，１８９１年１２月３日の補足的所見から推測されうる．この所見を大学は文部省の要求に従って後から提出しなければならなかった．

学部はこのリストのトップにこの時シュトットガルトのカールスギムナジウムの教授であったマックス・ライシュレを置いた．文部省がこの提案を受け入れそうにないということが明かになった時でも，学部はライシュレに固執した．ベルリンからの抵抗にもかかわらず，<<レメ教授のポストに対するわれわれの以前の丁重な提案を撤回する気にはならなかった．むしろ教

授のポストが問題であるので，われわれはまず第一にライシュレ教授のように成熟した人として長い教職活動と神学的な立場の明確な刻印によって神学講師並びに学者として今後の発展に確実な保証を持っている人に注目したい>>．学部はいくつかの出版物によってすでに自分を明確に示している人，立場的に自分をはっきりとさせている人によって補足しようとした．何となればライシュレの場合にはA.リッチュルの弟子としての彼の自己定義の一義性が<<かれの神学的立場の明確な刻印>>を表していた．リッチュル自身は１８４６年から１８６４年までボンで教え，そしてその時カムプハウゼンとかなり近い関係になった．ゲッティンゲンへ移ってからも彼はこれまでのボンの同僚といろいろな関係を持った．その限りで，とりわけ学部の比較的古い構成員たちはライシュレの終始第一の地位を主張したという――もちろん証明されえないが――推測は的をはずれていない．一人のリッチュルの弟子が学部内でライシュレの可能な場所を正確に予想することができる保証を提供した。

このことは二番目に挙げられている人，即ちウイリアム・ヴレーデの場合にはずっとむつかしかった．<<この年の６月３０日の日付けでボン大学の神学部によってつくられた報告>>，即ち彼らの提案を理由ずけるのに役立つヴレーデの性格描写が，１８９２年８月２２日に文部省によってブレスラウの員外教授にヴレーデを間もなく任命するということに関連してコピーの形で<<プロテスタント上級教会会議>>に送られた．<<信仰告白と彼の学説に関して好意的な所見>>をお願いしたいということを添えて．そこにボンの人たちは，何故に彼らがゲッティンゲンで１８９１年３月に新約聖書の釈義で教授資格を取ったヴレーデを組織神学のポストに提案するかを理由ずけている．<<これまでの活動が圧倒的に実践神学と新約聖書学の領域に向けられているヴレーデはライシュレのように組織神学の領域における学問的権威として公的に自らを証明する状況にはなかったので，われわれは彼を二番目にようやく提案することができる．しかし彼は倫理学と教義学の教師に課せられた課題に難なく入っていけるであろうということを，彼にはこれに必要な素地が欠けているように思われないが故に，前提としている．彼の学位授与の際に提示され，印刷されたテーゼは組織神学の独立した理解を認識させる．>><<これまで彼によって印刷されたもの>>は<<学問的方法とアカデミックな神学研究の実践的目的によく精通しているところの>><<広い知識と独立した思考の神学者>>を示しており，また彼はゲッティンゲンで大いなる教師としての成果をあげているので，彼は組織神学者の教育活動に課せられうる要求に応えうるであろう．更に，ヴレーデは<<ライシュレのように，誠実かつ敬虔な人，信頼できる，愛すべきキャラクターとして，尋常ならざる才能を持った神学者として，賛美される>>．<<Loccumの修道士として彼を観察することのできた<<Apt Uhlhorn>>のように資格のある判断者の側から<<候補者ヴレーデ>>に<<アカデミックな活動にきわめて有利な前兆があるという判断が下された>>．文部省のなかで学部によって第一に挙げられた人を貫徹するために，学部がヴレーデを第二番目に挙げたかどうか――誰が第三番目に提案されたのか，という問題と，そもそも誰かが第三番目に提案されたかどうか，という問題は生じえない――は資料からは答られえない．組織神学の講座のポストにライシュレの次に組織神学者でない人を推すという尋常でない出来事にE．グラーフェが関わらせられた可能性がある．<<かつまた学部の注意が，ヴレーデを個人的に知っている構成員の幾人かによって，私講師・神学得業士ヴレーデに向けられた．彼は，神の恵みを受けて，活動したハノーヴァ地方の牧師職からアカデミックな人生航路へ最近移されたばかりであった．>>このことはあるいはグラーフェにも当てはまる．１８８６／８７の冬学期から１８８８／８９の冬学期を含めて，彼はハレに滞在中若い員外教授としてA．アイヒホルンと個人的に親しく接触した．アイヒホルンは１８８６年夏学期にハレで教会史で教授資格をとったのであった．アイヒホルンは１８８５年秋にゲッチンゲンからハレへ行ったとき，彼は友人O．バウムガルテンが住んでいるヘンデルシュトラーセへ引っ越した．ここにはF．ルーフスも住んでおり，またここに最後にグラーフェも家を見つけた．バウムガルテンの家のみならず，<<グラーフェとルーフスの親しい家々がアイヒホルンに開かれていた>>．<<グラーフェと親しく交わったことがアイヒホルンにとって非常に意義があった．つまりこの客あしらいの良い家において彼のおしゃべりの才能がのびのびと発揮された．>>その際アイヒホルンはヴレーデとグラーフェの面識をも仲介したのであろう．ヴレーデとアイヒホルンは１８８４年以来，フーゴ・グレスマンが<<生活同盟>>と呼んでいるほど親しい関係にあった．いずれにしてもゲッチンゲンの人ヴレーデは<<ハレへの再三の短時間の訪問>>をした．逆にアイヒホルンはゲッチンゲンへ<<よく訪問することによって>>交友を持った．ヴレーデはこの時期彼の教授資格取得のための最初の幾つかの研究にたずさわっており，そのことでアイヒホルンとたえず議論をしており，アイヒホルンとグラーフ

ェの間の交友はグラーフェが<<新約聖書の領域におけるグラーフェの考え方にアイヒホルンの特別な理解>>を見いだしたことによって強められたので，ヴレーデがハレのアイヒホルンを訪問したときに，グラーフェとも知り合いになったと思われる．それ以上に，ボンの学部の他の構成員の誰がヴレーデと個人的に面識があったかは決定されえない．このことはここではこれ以上関心を持つ必要がない．ベルリンではもう一人別のゲッチンゲンの私講師がひいきされた——２７才のエルンスト・トレルチであった．

トレルチは文部省のなかで神学上のポストへの招聘問題において最も重要な人によって保護された．それは人々がしばしば察することができるフリートリッヒ・アルトホッフではなくて，ベルリン大学の新約聖書神学の正教授ベルンハルト・ヴァイスであった——彼は１８９０年にゲッチンゲンの員外教授に昇進させられたゲッチンゲンの私講師Ｂ・ヨハネス・Ｗ・ヴァイスの父であった——．ベルンハルト・ヴァイスは１８７７年の夏学期にキールからベルリンへ招聘された後，彼はそこでまず最初<<ブランデンブルクの宗教局の構成員>>に任命され，そして１８８０年５月に<<文部省の上級宗教局評定官>>に任じられた．この<<文部省のポスト>>を引き受ける交渉について，ヴァイスは彼の自伝において次の様に報じている：<<私は宗教局の一つの確固とした部門を担当したい．そしてプロテスタント系の神学部の身上書においては，今後，私のサインなしには何事も定められない様にしてほしい>>．事実，それからいっさいの招聘はヴァイスによって軌道にのせられた．１８８２年，あるカトリック教徒——このカトリック教徒にヴァイスは<<プロテスタント系神学部を完全に私にまかさなければならない>>と宣言していた——の後任としてフリートリッヒ・アルトホックが常勤の担当官に就いたときも，このことは変わらなかった．ただ一度だけ，Ｐ．チャッケルトがケーニッヒスベルクへ招聘されるとき，アルトホッフは最初彼の非常勤の<<第二報告者>>［ヴァイスのこと］の提案に従うことを拒否した。けれどもヴァイスはこの場合も自分の主張を［結局］つらぬくことができた．<<神学部の身上書の部門において彼は長い間オールマイティであった>>．

彼の前任者のすすめに従って，ヴァイスは<<招聘される人と個人的に面識を持たずには招聘に関わらない>>ということを特別な原理にした．だから彼は多くの<<職務上の旅行>>について報告している．この旅行において彼は<<すべてのドイツの大学及びその神学者達と深く知り合いになる>>ことができた．<<問題となっている人物をその人自身が講義している教室で知る>>という原則に従って，彼は１８９１年１０月１５日と１１月２１日の間のいつかある時，ゲッティンゲンへ旅行をした．この旅行に就いて１８９１年１１月２２日に大臣に詳細に報告している．<<２，３人のゲッティンゲンの私講師の教職活動についてなされた報告>>のうちトレルチに該当する部分だけが存在する．この抜粋のはじめは，ヴレーデにかわってトレルチをボンのためにひいきしたのはヴァイスであった，ということを十分に明らかにしている：<<それに対して，すでに１～２年ミュンヘンにおいて実践的な教会活動をした得業士トレルチは，彼はまだ２７才にもかかわらず，私が考えるところでは，かかるポスト［組織神学の員外教授］に全く十分の能力を持っている>>．報告のすぐ前の項でヴレーデについて語られたに違いない．ブセットは教会活動をしていなかったので［対象外であった］．組織神学の員外教授の<<ポスト>>への直接の関連づけはゲッティンゲン旅行はレメのポストの補充と直接関係しているという推測を許す．ヴァイスと大臣とはライシュレを明らかに招聘したくなかった——もしかしたら，財政的な理由から組織神学第二教授のポストを員外教授に換えたかったのかも知れない．しかし次にヴァイスはヴレーデの教職活動の個人的な印象を得なければならなかった．その際，１８９０／９１の冬学期以来ゲッティンゲンで教授資格をとった他の＜若い人たち＞をも昇進の可能性という点で検査をするということはもっともであった．トレルチが唯一の人としてヴァイスを確信させたように思われる．ブセットは周知のようにブロイセンでは出世できなかった．ヴレーテが１８９３年春ブレスラウの新約神学の員外教授に招聘されたとき，文部省はプロテスタント上級教会会議に鑑定人としての態度決定の基礎資料としてヴァイスの報告の抜刷を送らなかった——トレルチの場合と異なって——．

トレルチについては，ヴァイスは大臣に何の制限もつけずに，彼はまだ若いが昇進に適している，と報告することができた．<<教義史の領域から取り上げられた彼の教授資格取得の書物がすでに非常に好意的に判断されていた．実際，この書物はむつかしいそして広範囲に及ぶ資料を非凡にこなしていること，並びに独立した判断と好ましい叙述方法を証している>>．同時にヴァイスはトレルチの教職活動から得た印象を再現している：<<私はトレルチからシュライエルマッハー神学についての非常に強く求められていた講義を聞いた．この講義においてトレルチは生き生きとした，明快な方法で大神学者のカントへの関係を論じた．また

シュライエルマッハーの発展史の糸をたどりながら，彼の父への関係と彼の家庭教師としての生活の非常に魅惑的な像を描いた>>．この積極的な判断が，有名なベルリンの正教授と若い私講師との可能な個人的面識によって，どの程度まで助長されたか，少なくとも今のところは確認されえない．なるほどトレルチはベルリンで大学生として研究した．その際彼は＜１８９１年に振り返りながら書いているように，神学においては<<特に釈義的な研究>>を行った．この注は暗にベルンハルト・ヴァイスを指している．つまりトレルチは彼の学位取得の必要書類に添えられたラテン語の履歴においてはっきりとＢ．ヴァイスを彼の先生の一人として挙げている．１８８６年夏学期に彼はヴァイスのところで毎週４時間<<ロマ書>>の講義を聞いた．けれどもこのことはトレルチがベルリンの学生の時すでにヴァイスに知られていたという推論を許さない．ヴァイスはベルリンで<<超満員の聴衆の前で>>講義をした．１８８９／９０年の冬学期には彼はたとえば<<ほぼ４００人という>>神学部のなかで<<最大の聴講生数>>を持った．しかしヴァイスがごくかぎられた数の学生のために行った演習にトレルチが参加したかどうかは確認されえない．けれどもヴァイスはゲッティンゲン旅行においてトレルチの第一ゼミナールに参加し，そして大学教師としてのトレルチの才能についてのすでに講義においてえられた肯定的な判断が証されるのを見た．<<更に，彼がかなりの数の聴衆者と行ったゼミナールの演習に私が出席することができたことは私にはもっと価値あることであった．この演習において彼はやや活発でない聴衆者を雑談風にリッチェルの＜キリスト教の授業＞にひき入れようとしたのであった．ここでも彼は材料と材料を自由に使用する方法を完全にコントロールしていることを示した>>．

この評価に基づいて，ヴァイスがゲッティンゲンから帰ってのち比較的はやく，文部省はトレルチのボンへの招聘を行った．ベルリンから推挙された候補者に対して意見を述べるようにという大臣の要求に学部はすでに１８９１年１２月３１日に従っている．<<今年の７月３日のわれわれの従順な報告の経過のなかで――…――問題になっている人事に関してゲッティンゲンの私講師・得業士トレルチについて専門家の立場から意見を述べることをわれわれの大学の督学官の仲介によって閣下から要求されて，われわれの意見を述べることによってわれわれの以前の提案を，これを何らかの方法で放棄することなしに，本質的に補いたいと思ってといるので，そういう理由でこの課題に応じるのです>>．片や学部は自分達の候補者名簿を堅く守ろうとした，もしくは組織神学の第二教授のポストを保持しようとした．しかし他面，トレルチはボンの<<ポスト>>に少なくともヴレーデよりも適していなくはないと承認せざるを得なかった．だから学部は最初弁明的に振舞った．<<われわれが閣下に前の報告をする名誉をもった時，われわれにとって上述の神学得業士トレルチに斟酌するきっかけはなかったのです．というのはトレルチは当時神学界に論文を発表して知られるまでには至っていなかったのです>>．しかしそうこうするうちにトレルチは神学界に登場した．<<しかも専門家の注目を引きつける方法で．彼の最近出版された書物＜ヨハン・ゲルハルトとメランヒトンにおける理性と啓示＞は宗教改革と古プロテスタントの神学について並びにこれらについての最近の研究について著者の年の割には驚くほど豊富で，正確な博識を示しており，歴史研究における非常なる綿密さと健全な判断を示している>>．同時にボンの人たちはトレルチに対してある距離を認識させた．それは多分彼らが講座のポストの員外教授のポストへの変化を防ぎたいという理由から説明される．<<もちろんトレルチによって歴史的に取り扱われた問題に対するトレルチの固有の原理的な立場並びにこの書物の神学的立場は完全には明確に表現されていないし，また必ずしも全く矛盾なく表現されているわけではない．彼は立派な青年であるのだから，全般的によく練られたられた神学的確信というものが期待されてよいのに全然期待されえない>>．このことはライシュレの性格を追憶させる．トレルチには学部の目にはライシュレをしてボンに非常にふさわしくさせているもの，つまり確固とした立場とリッチュル学派への明確な関係が欠けている．いづれにしてもボンの人達はこの若いゲッティンゲンの学者をリッチュル学派に属する人とは見なかった．<<上述の様な欠点を補っているのが現在の支配的な学派からは独立して独自の見解を獲得したいといういたるところで認識されうる彼の努力である>>．しかしかかる独立性は学部にとっては計算しにくいものである．かくてボンのトレルチに対する専門家の立場からの意見は一面では肯定的，他面では否定的という傾向によって支配されている．<<彼の人格に関しては，彼の人格は今尚顕著に青年として成長しつつあるが，元気さと率直性によって獲得されたものであるように思われる>>．ラインラントとヴェストファーレンのプロテスタントの教区誌において<<文部大臣>>は<<ボンの神学部の提案に従って前私講師・神学得業士トレルチをボン大学プロテスタント神学部員外教授に任命した>>と後に発表されたとき，この<<提案>>が本来ベルリンから発せら

れ，ボン人はこの提案を制限をつけてのみ自分の意見としたというかぎりで，適切ではない．すでにヴュルテンベルクのギムナジウムの教授であったライシュレと異なって，トレルチの着任は正規の教授ポストの喪失もしくは員外教授への転換を意味した．

１８９２年２月９日大臣はプロテスタント上級教会会議に，トレルチを<<組織神学の員外教授としてボン大学へ招聘する>>という<<意図>>を伝えた．<<神学得業士トレルチは最近ようやく学者としての人生航路を歩みだしたばかりなので>>，ヴァイスの報告の抜粋とトレルチに対するボンの態度と並んで<<トレルチ博士のこれまでの主著とキール大学のカヴェラ教授によるこの書物の批評を送ります>>．この材料がプロテスタント上級教会会議に<<上述の人の信仰告白と学説に関して専門家の立場からの好意ある意見>>を表現化することを可能にしたと思われる．<<９２年２月１１日>>のプロテスタント上級教会会議での手紙の受領日付印は
<<＜速達＞で届いた>>という覚え書きを含んでいる．手紙にはヘルマン・フォン・デア・ゴルツ並びにプロテスタント上級教会会議の他の二人の同僚によってイニシャルでサインがなされている．同じサインはヘルマン・フォン・デア・ゴルツに由来する１８９２年２月２４日の返信の手書きの草稿にみられる．彼の伝記が報ずるところによれば，ヘルマン・フォン・デア・ゴルツはプロテスタント上級教会会議の<<聖職者の副会議長>>として教会会議の願望に考慮をはらい，教会の側からの神学を学ぶ青年の教師に課せられるべき要求を聞いてもらうということに非常に苦労をしていた．特にこのときは［教会的立場の］リッチュルの神学は諸学部において［リベラルな］宗教史学派からきりはなされはじめていた．つまり［トレルチの立場である］宗教史学派に対してはリッチュルは彼の全体的由来と神学的発展によって内的には異質であったからである>>．この査定はトレルチに関しては証される．何となれば<<神学得業士トレルチの人生航路並びにこれまでの業績を包括的に展望できることへの礼>>に続いて，フォン・デア・ゴルツは，プロテスタント上級教会会議はトレルチを無制限に支持することはできないと考えていることに言及している．<<丁度２７才になったばかりで，一年前からようやく＜大学教師として活動している神学得業士トレルチの場合に，信仰告白と学説についてわれわれの一定の見解を持つことはできなかった>>．きわめて外交的な表現を使って，トレルチに反対の態度をとったりあるいは賛成の態度をとることへの断念を気づかせている．プロテスタント上級教会会議は文部省の態度を積極的に支持する気はなく，すでにボンの学部の専門家の立場からの意見において含まれているトレルチの若さへの言及をもう一度強調している．<<こういう事情のもとでは非常に若い，内面的に今までまだ自覚していず，成熟していない神学者の組織神学への招聘についての責任に関する考慮を貴殿はボンの学部にまかせるべきであるとわれわれは思います．しかしそのことから，目下彼の招聘に反対して信仰告白と学説に関して疑念をひきだすつもりはありません>>．

それ故トレルチの任命にはもはやなにも邪魔するものはなかった．大臣からプロテスタント上級教会会議あての書簡には３月１４日の日付がある．<<今年の２月２５日のお手紙に関連して>><<謹んで>><<私は私講師・神学得業士エルンスト・トレルチを今日付の辞令で，ボン大学プロテスタント神学部員外教授に任命した>>．今では再構成され得ない理由からレメのポストは員外教授へと変えられた．そしてこのことはベルリンの文部行政にとっては財政的節約を意味した．員外教授としてトレルチは常勤の公務員ではなかった．そして年俸１８００マルクと住宅手当６００マルクを彼は報酬として得たが，正教授よりずっと少なかった．<<私にとって全く限りなく喜ばしい安全な官職のポストの意識>>についてトレルチはハイデルベルクの教授への招聘の関連ではじめて語っている．ベルリンの文部省は彼にゲッティンゲンからボンへの引っ越し費用を払わなかった．

ベルリンではライシュレよりもトレルチの方を優先させたということは学部にとっては正教授のポストの喪失を意味した．員外教授は学部の投票権のあるポストではなかった．けれども<<正教授の>>――それ故にＦ．ズィーフェルト［組織神学第一講座教授，学部長］の――<<教職活動を助ける形で>><<組織神学の部門>>を代表しなければならなかったトレルチはプロテスタント神学ゼミナールの共同管理をまかされた>>．レメのために１８８６年に――<<ゼミナールの規約と矛盾して>>――固有の<<組織神学のクラスが設立され>>たので，トレルチは古い講座のこの権利に参加した．

［続く］